

# 関東地方内陸部の産業施設についての近代建築 技術史を軸とする調査研究

——内務省勸業寮屑糸紡績所（現カネボウ食品工業新町工場）  
の建築について——

清水慶一<sup>1</sup>・中島久男<sup>2</sup>・山口義弘<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 国立科学博物館理工学研究部

<sup>2</sup> 横浜市立鶴見工業高等学校建築科

<sup>3</sup> 日本大学生産工学部建築工学科

## Historical Study on Industrial Facilities at the Inland Kanto District, Centering around the Development of Architectural Technology in Japan

—A Historical Research on Facilities of Shinmachi Waste  
Thread Spinning Mill—

By

**Keiichi SHIMIZU<sup>1</sup>, Hisao NAKAJIMA<sup>2</sup>,  
and Yoshihiro YAMAGUCHI<sup>3</sup>**

<sup>1</sup> Department of Science and Technology, National Science Museum,  
Tokyo

<sup>2</sup> Tsurumi Industrial Senior High School, Department of Architecture,  
Yokohama

<sup>3</sup> College of Industrial Technology, Nihon University, Architectural  
Technology Course, Chiba

**Abstract** This paper is a study on a typical industrial facility built early in the Meiji era (1868–1912), when several western industries were introduced to Japan. It was a reason why we selected this facility to research, that this facility had a value for research as a result of (data from) the survey of the various historical industrial facilities existing around the Inland Kanto District in 1988. The principal purpose of this project is to make clear the character of technology transferred from the western world to Japan in the Meiji era.

This object, originally called Shinmachi Waste Thread Spinning Mill (now Kanebo Food Company, Shinmach Factory), was known as one of the earliest industrial facilities existing in Japan. Although quite popular in history of Technology, this facility was not researched in a regular historical survey. Therefore, the year of establishment of each structure was not confirmed.

One purpose of this research is to confirm the establishment year of some of the structures. As a result of this research, we could confirm, that the earliest one was built in 1894, and also two buildings were built around 1898. Though we could not point out the original structure of these facilities, we pointed out the possibility they existed.

The second purpose of this research is to prove the relationship between the development of the power system and the change of the facility structure. And we could get a following result that the development of power system is closely related to the arrangement of each facility. That was shown by the survey of structures.

At first, the original factory established the power plant that had used a double system of power with both a water turbine wheel and a system engine. Secondly, a single system with a steam engine was used. And finally, an electric motor system took the place of it. By this research, we could see the growth of these facilities and the development of the power plant. From correspondence between this result and both some existing drawing of factory plans and documents, we concluded that the development of the power system influences the structure of a facility.

## 1. はじめに

本稿は、文部省より科学研究費助成を受けた「関東地方内陸部の産業施設についての近代建築技術史を軸とする調査研究」の一環として行った個別事例についての研究報告である。先行して行った調査によって、関東地方内陸部に現存する主要な明治・大正の産業施設については、その現存状況を概ね確認し得たといえる。<sup>1)</sup>では個々の産業施設はいかなるものであるのかとして、具体的な事例についての個別的研究を行ったのが、この旧内務省勸業寮屑糸紡績所（以下、屑糸紡績所と言う）についての調査研究である。この屑糸紡績所を選定した理由は、本工場の創設が明治 10 年にさかのぼることができ、極めて初期の洋風工場であること、また、その存在は従来より知られており建築史<sup>2)</sup>・産業技術史・経済史<sup>3)</sup>などで取上げられる事があったが、現存建築についての本格的な調査が行われたということをこれまで聞かぬためである。

## 2. 本調査研究の方法と基本資料について

本研究については、次のような方法をとった。まず前述の如く屑糸紡績所については、その存在は従来より知られていても、創設時の施設が現存するか否かについては、これまで確認された例を見ない。したがって、研究の軸の一つを現存建築の年代確定に置いた。また、産業施設についての研究は、従来、架構方式を中心として行われてきたといえる。<sup>4)</sup>しかし、本研究では、更に産業施設研究において動力伝達方式が有している重要な意味に着目し、その変容を分析することをもう一つの軸とした。

この二点より、本研究は明治 10 年の創設時における工場形態を基本とし、その発展過程の分析を中心に研究を進めた。したがって、その後の工場の拡張過程で設立された他の施設（学校・寄宿舎・住宅等）は対象とせず、先行して行った文献的資料等から得られた結果に基づき、旧二階家煉瓦庫・旧汽灌室・旧機械室・旧製品倉庫・旧糸工場の一部を中心とした調査を行い、これについては簡単なものながら実測調査を行った。参考にした文献的な資料は以下のものであるが、これに現在の工場が所蔵している種々の図面等をも参考にして研究を進めた。

現存建築の竣工年代の推定に用いた基本資料は、『新町紡績所沿革（自創業至 15 年 6 月）』<sup>5)</sup>（以下『沿革』と言う）、『新町紡績所払下げ資料』<sup>6)</sup>、『新町屑糸紡績所』写真<sup>7)</sup>、『三井銀行営業案内』<sup>8)</sup>、『明治大帝行幸記念・鐘淵紡績株式会社新町工場沿革概要』<sup>9)</sup>、『資産台帳』<sup>10)</sup>（明治 27 年 6 月）等である。実

測調査による現存建築の竣工年代確定等に、補足資料として参考にした図面は、「KANEGAFUCHI SPINNING CO. SHIMMACHI MILL」(明治44年10月17日)、「KANEGAFUCHI SPINNING CO. SHIMMACHI MILL」(鐘紡合併時頃、以下「鐘紡合併時頃の平面図」と言う)、「新町工場建物配置平面図」(大正3年)、「鐘紡紡績新町工場実測図」(大正3年)、「KANEGAFUCHI SPINNING COMPANY LTD. SHIMMACHI SILK MILL」(大正7年10月1日、以下「大正7年の平面図」と言う)、「鐘紡紡績株式会社新町工場建物配置整理予想案全図」(大正9年2月)等の現工場所蔵の図面である。<sup>11)</sup>

### 3. 工場の沿革について

本産業施設は、屑糸紡績所が創設された明治10年6月までさかのぼることができる。この地に屑糸紡績所が建設されたのは、明治8年末、佐々木長淳が工場建設地として新町の現在地を選定したことによる。その選定の理由として、この地が養蚕の盛んな地域であること、及び、動力として用いる水車を設置する上で、現在も流れている温井川と土地の高低差が工場として適していたことが挙げられている。建設は明治9年2月に着手され、翌10年6月に完成した。当時「内務省勸業寮屑糸紡績所」と称し、明治15年には「新町紡績所」と改称された。<sup>12)</sup>

明治20年5月、「新町紡績所」は三井の三越得右衛門に15万円で購入され、三越呉服店が経営することになり、「新町三越紡績所」と呼ばれた。<sup>13)</sup>その後、三井内部で幾度かの経営母体の変遷がみられた。まず、明治26年に三越呉服店が三井呉服店と改組したために「三井紡績所」と改称された。明治27年には、この「三井紡績所」は三井元方に新設された工業部に経営が移管された。<sup>14)</sup>しかし、この統合も長くは続かず、明治31年には三井元方の工業部が廃止され、再び三井呉服店に経営が移管された。<sup>15)</sup>

明治35年には全国的な不況により、「三井紡績所」は紡績5社と合併し「絹糸紡績株式会社新町工場」となった。明治42年3月、この新町工場は、管理方針から創業以来の絹糸紡績機を京都工場に移し、紬糸紡績専用工場に変えられた。明治44年3月「絹糸紡績株式会社新町工場」は、不況による経営困難のために鐘紡紡績株式会社と合併し、「鐘紡紡績株式会社新町支店」と改称された。大正8年から絹糸紡績が再開され、大正9年には製糸部が創設された。以後拡張を続け、昭和11年には新町支店から新町工場に改称され、<sup>16)</sup>昭和50年から食品工場となり現在に至っている。

### 4. 工場の建設過程について

上記の工場の沿革に従い、本研究の研究対象である明治期の産業施設を中心に、工場の建設過程の変遷について述べる。

#### 1) 官営工場時代(明治10～同20年)

創立時の屑糸紡績所の基本資料としては、前記『沿革』があり、その内の平面図「上州新町屑糸紡績所新築之図」(図1)と明治14年8月の項の所長心得岡野朝治が製作した「財産ノ保存年表」から当初の配置と規模がわかる。この施設は、工作場(3棟)、石炭置場(1棟)、糸貯所(1棟)、繭庫(1棟)、修繕場(1棟)、事務所(1棟)、糸庫(1棟)などの建物がコの字型に配置され、中庭を囲む平面形式を持つ形をしていた。また、動力部は、第一業工場に20馬力の平衡水車、第二業工場に40馬力の蒸気機械が設置された。<sup>17)</sup>工場の外観を示す資料としては、宮内庁書陵部所蔵の写真「新町屑糸紡績所」<sup>18)</sup>(写真1)と絵図「上州新町駅紡績所」<sup>19)</sup>(図2)があり、工場建物は木構造平屋建、屋根は切妻瓦葺であったことがわかる。この設計者について述べれば、

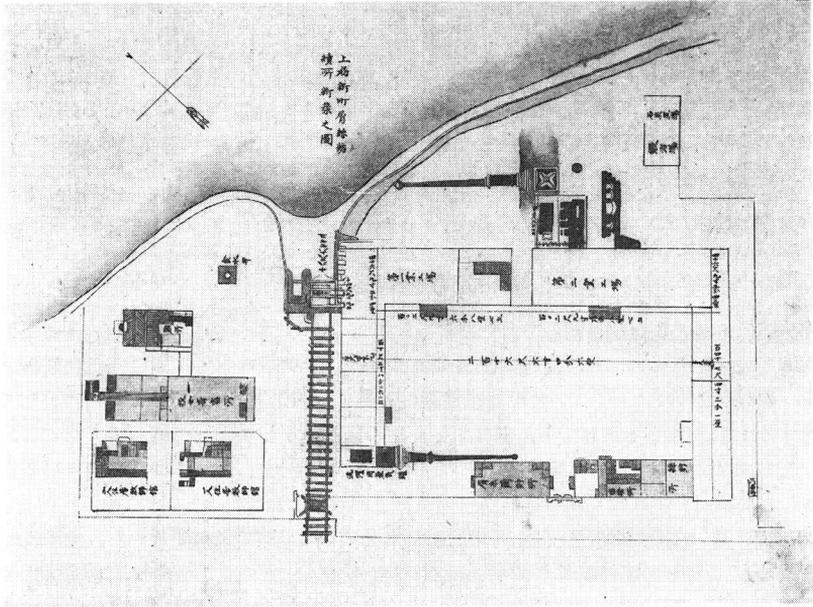


図 1 上州新町屑絲績所新築之図 (国立公文書館蔵)

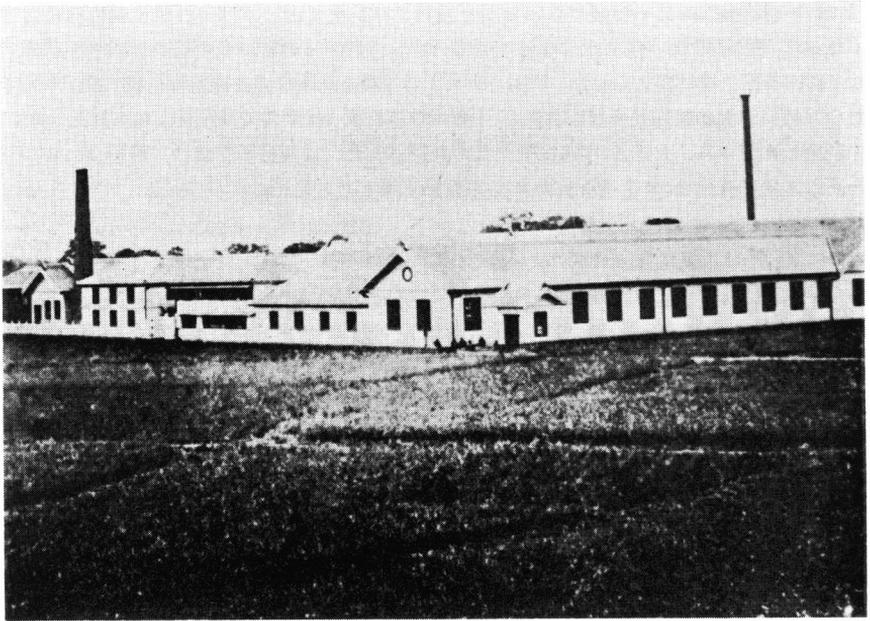


写真 1 新町屑系紡績所 (宮内庁書陵部蔵—『群馬県史』より転載)

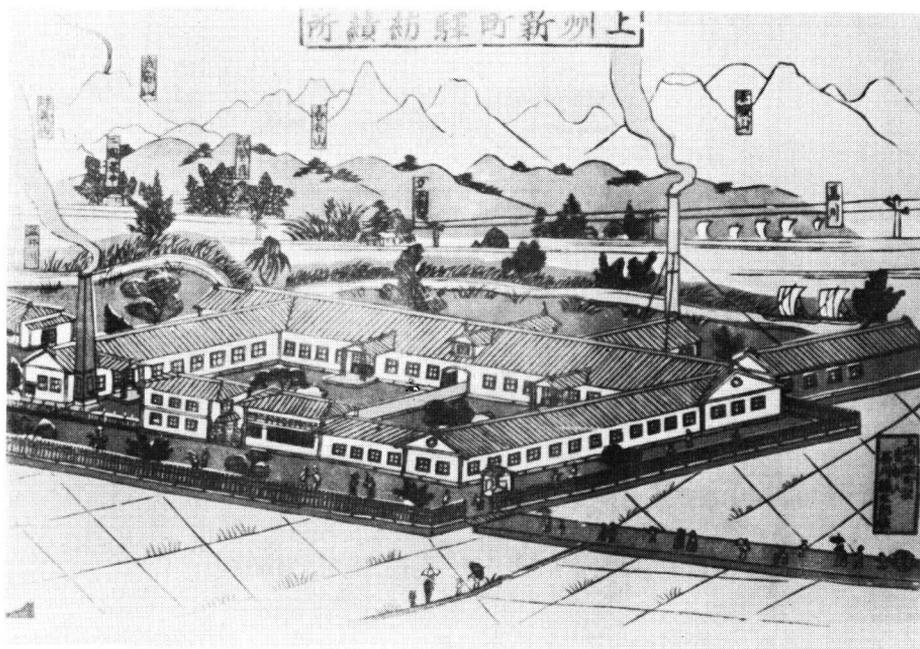


図 2 上州新町驛紡績所

「二月土功ヲ起シ勸業寮七等出仕佐々木長淳ヲシテ土木一切ノ事ヲ擔任セシム  
五月グレーベン建築點検ノ為出張ス」

とし、公式的には佐々木長淳、グレーベンと記されるが、<sup>20)</sup> 山添喜三郎の関与も看過する事はできず、彼の記した「澳國博覧会后建築術ノ経歴」によれば、自らの設計であるとする。<sup>21)</sup>

## 2) 三越・三井時代 (明治 20～明治 35 年)

前述の如く、明治 20 年に屑糸紡績所は、三越呉服店に払下げられた。払下時の資料としては『新町紡績所払下げ資料』があり、その内に「新町紡績所二百分之一絵図」(図 3)、「新町紡績所一覧表」が載せられている。<sup>22)</sup> これによれば、創設時からの配置・規模に比較して変化はあまりなく、石炭置場 (1 棟) 等若干の施設が新築されたに過ぎない。続いて明治 20 年より同 27 年までの三越呉服店時代の建設過程を示す資料については、カネボウ食品工業所蔵の『資産台帳』<sup>23)</sup> (明治 27 年 6 月製作) がある。それによると、その間の主要な増築建物は、明治 21 年の煉瓦造瓦斯<sup>読メズ</sup>〇室 (1 棟, 22 坪), 煉瓦造湯沸場 (1 棟, 25 坪), 男工控所 (1 棟, 28 坪), 英学校 (1 棟, 40 坪), 明治 22 年の会計方物置所 (1 棟, 25 坪), 繭庫 (1 棟, 266 坪), 明治 25 年の女工控所 (1 棟, 24.5 坪), 繭庫 (1 棟, 50 坪), 明治 27 年の新工場 (1 棟, 476 坪), 二階家煉瓦庫 (1 棟, 13.4 坪), 繭庫 (1 棟, 30 坪), 女工学校 (1 棟, 40 坪) であり、順次拡張されていった過程がわかる。また、これらの外観については確認でき得る資料を見出せぬが、煉瓦造と記載のない建物は全て木造と考えられる。

明治 27 年より同 31 年までの三井元方工業部時代の基本資料には、明治 32 年 1 月刊行『三井銀行営業案内』<sup>24)</sup> があり、その内に工場全景写真 (写真 2) がある。この写真によると、明治 27 年 6 月の『資産台帳』に記載のない新しい動力部である汽灌室・機械室及び、製品倉庫と思われる建物が見える。

新町紡績所二百分之一絵圖

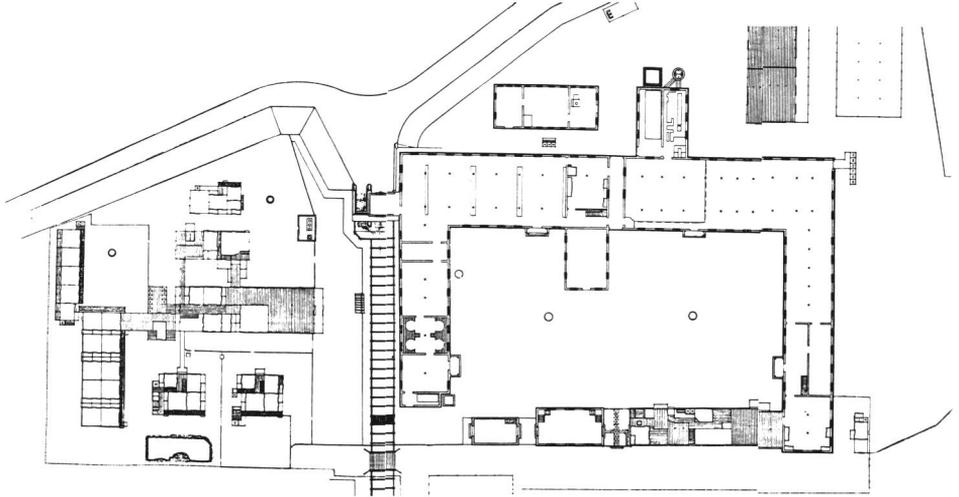


図 3 新町紡績所二百分之一絵図 (国立公文書館蔵)

一方、創立以来の動力部の状態は確認できないが、新しい動力部の煙突と共に初期の煙突が写真右の遠方に見える。なお、写真左側の煙突は、これも当初よりある洗濯用蒸気灌の煙突と推定される。次に写真に見える工場北側棟の妻部分東側についてであるが、明治 20 年の「新町紡績所二百分之一絵図」(図 3) との照合によって、創立時に比べて突出しており、しかも幅が広がっているようである。また、この部分の外観は、上部の円窓や開口部が現状と一致している。以上の結果より現存の状況と対照し、年代の古い建物と考えられる旧二階家煉瓦庫、旧汽灌室、旧機械室、旧糸糸工場の一部については、実測調査を行った。

### 3) 絹糸紡績時代 (明治 35 年～同 44 年)

明治 35 年から明治 44 年までの絹糸紡績株式会社時代については、基本資料の存在を確認できなかった。

### 4) 鐘淵紡績時代 (明治 44 年～)

鐘淵紡績株式会社合併時の基本資料として、カネボウ食品工業所蔵の『明治大帝行幸記念・鐘淵紡績株式会社新町工場沿革概要』<sup>25)</sup>(昭和 12 年)を参照した。本資料中には明治 44 年の工場全景の写真(写真 3)が掲載され、前述の明治 32 年の工場全景の写真(写真 2)と比較し得る。これによれば、旧動力部と洗濯用蒸気灌の煙突が消えていることがわかる。また、合併時の配置・規模に関しては、カネボウ食品工業所蔵の「大正 7 年の平面図」(図 4)から推定が可能である。これらの資料から、明治 30 年頃に工場建築としての基礎が整い、明治 40 年頃には創建以来の建物は大幅に建てかえられ、新たに大規模工場として再構築されたと推定することができる。また、「大正 7 年の平面図」を見れば、元の動力伝達室であった部分が拡張されて発電機室になっており、この時期以降、動力システムが電動に切り替えられたと考えられる。

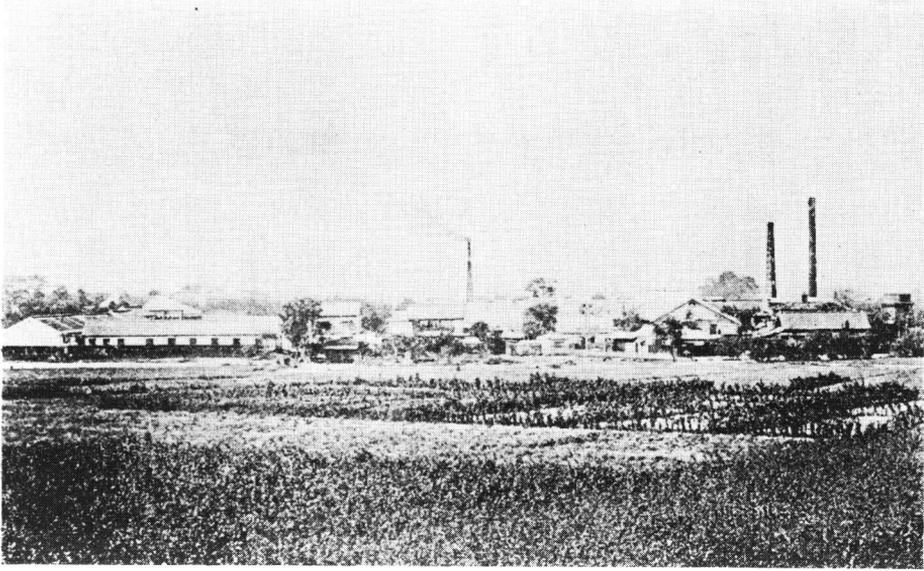


写真 2 新町紡績所 (三井文庫蔵)

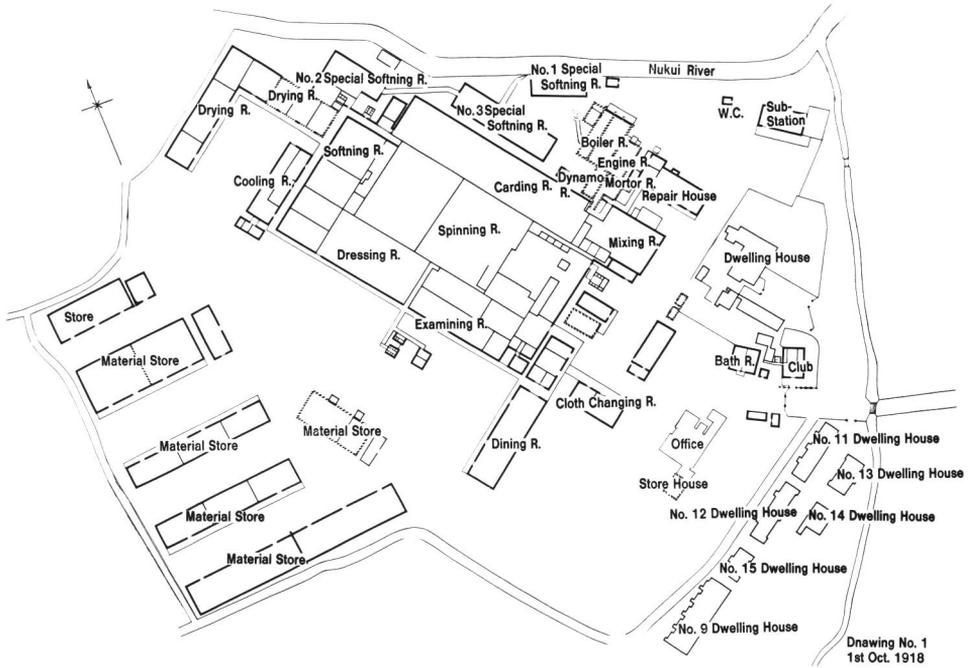


図 4 大正 7 年の平面図 (“KANEGAFUCHI SPINNING COMPANY LTD. SHIMMACHI SILK MILL” よりトレース。主要な施設名のみ記入, R は Room の略記)

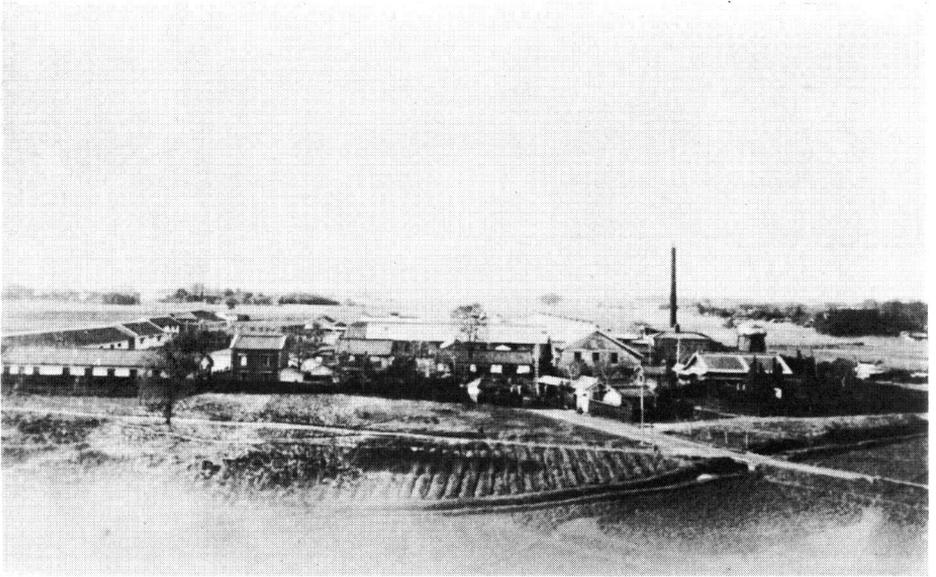


写真 3 新町紡績所 (明治 44 年)

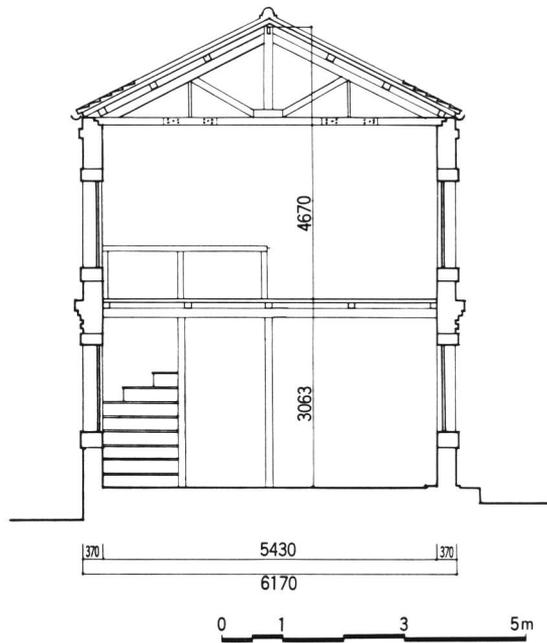


図 5 旧二階家煉瓦庫実測断面図

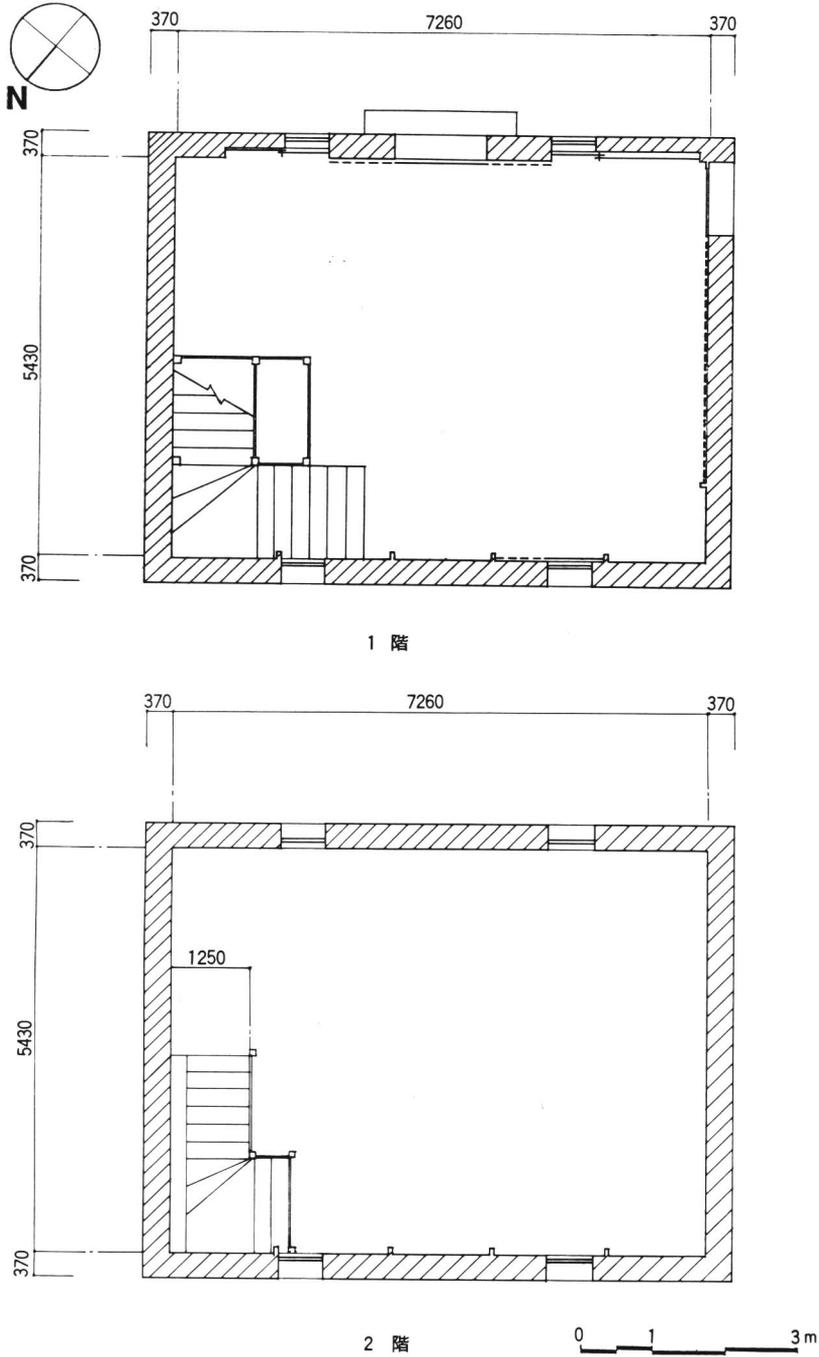


図 6 旧二階家煉瓦庫実測平面図

## 5. 主要な建物の建築的特徴

ここでは、上記の文献的研究より選定された建物の実測の調査結果に基づき、建築の現状と竣工年の推定を軸として分析を行う。実測調査の対象とした建物は、旧二階家煉瓦庫・旧汽灌室・旧機械室・旧製品倉庫・旧糸糸工場の一部である。

### 1) 旧二階家煉瓦庫

#### a) 現状

煉瓦造 2 階建、壁がイギリス積であり、屋根は切妻瓦葺である。内部は床が板張りで、壁は堅羽目、小屋はキング・ポストによる洋小屋組である（図 5）（図 6）。屋根の妻側部分は煉瓦が雑に積まれてモルタルが塗られており、明らかに改修の跡が見られる。

#### b) 竣工年と建物の変遷

明治 27 年 6 月の『資産台帳』<sup>26)</sup>に明治 27 年の竣工と記載されており、面積も対応することから、この建物の竣工年代が確定できる。

### 2) 旧汽灌室・旧機械室（旧動力部）

#### a) 現状

旧汽灌室は煉瓦造平屋建て、壁がイギリス積であり、屋根が寄棟瓦葺である。北側に木造の増築があって外観が隠れているが、矩形の平面の短辺方向にアーチ窓が三つ続いている。内部は、床が土間コンクリート、小屋組は洋小屋で中央に煉瓦壁があり、この左右の小屋組の構造は明らかに異なっている。初期建設部分の小屋組の斜め梁は、壁に付いた受石から出ており、その受石に柱が付いている特色のある意匠の小屋組である（図 7）。機械室側の壁には窓の痕跡があるが、これには煉瓦が充填されている。増築部にも床に近い部分の壁にモルタルを充填した痕跡があるが、「大正 7 年の平面

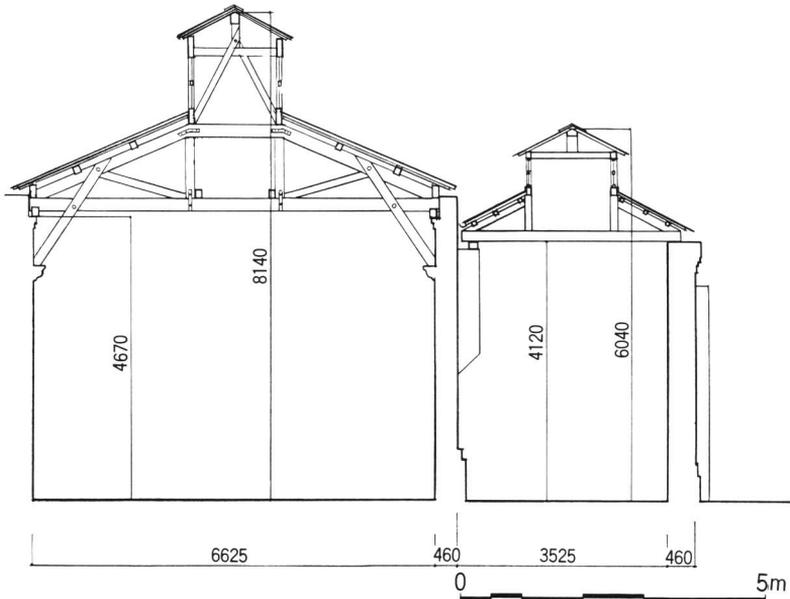


図 7 旧汽灌室実測断面図

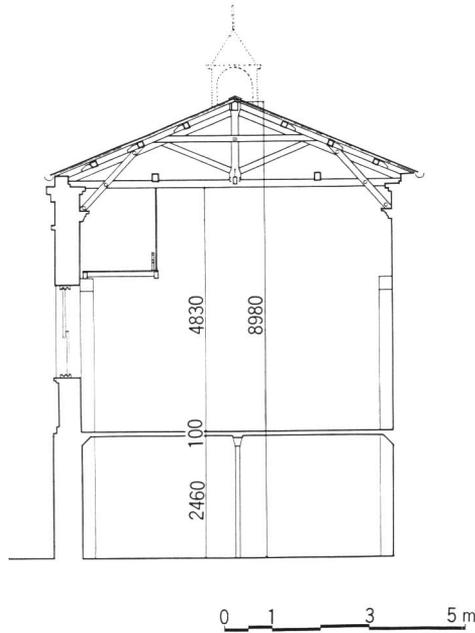


図 8 旧機械室実測断面図

図<sup>27)</sup>(図 4) から近接した煙突に煙を導いた煙道であることがわかる。

旧機械室は煉瓦造平家建て、壁がイギリス積であり、屋根が寄棟瓦葺である。後に鉄筋コンクリートの床と階段を付けるという改修を行って、地下室と 1 階に分けている。内部は床が土間コンクリート、小屋組は旧汽灌室と同様の形式で、斜め梁が壁の受石から出ており、その受石の上に柱が付いている(図 8)。

b) 竣工年と建物の変遷

前述の『三井銀行営業案内』(明治 32 年 1 月)の全景写真(写真 2)より、これらの建物の基本形は、明治 31 年には竣工していることが判明する。ただし、明治 27 年 6 月の『資産台帳』では確認できず、この間に竣工したと思われる。

旧汽灌室は、「鐘紡合併時頃の平面図」<sup>28)</sup>(図 9)によれば、はじめ 2 基のボイラーが縦に配置されており、大正 3 年の「鐘紡紡績新町工場実測図」<sup>29)</sup>によれば、増築が行われて現状と概略が一致する(図 10)。

旧機械室は、実測の平面図(図 10)と「鐘紡合併時頃の平面図」(図 9)より類推すれば、当初は現在の地下室の床にエンジンが設置され、現在みられる二階の床はなく、北側正面の階段で現在の地下室に降りていたと考えられる。現在の工場側の壁面には、煉瓦を充填した窓の痕跡があるが、これは機械室からの動力伝達装置が通った部分であると考えられる。ここには工場側に連絡する煉瓦造の部分が見られるが、「大正 7 年の平面図」(図 4)によると、変電室として改築が行われていて、その痕跡を確認することができる。

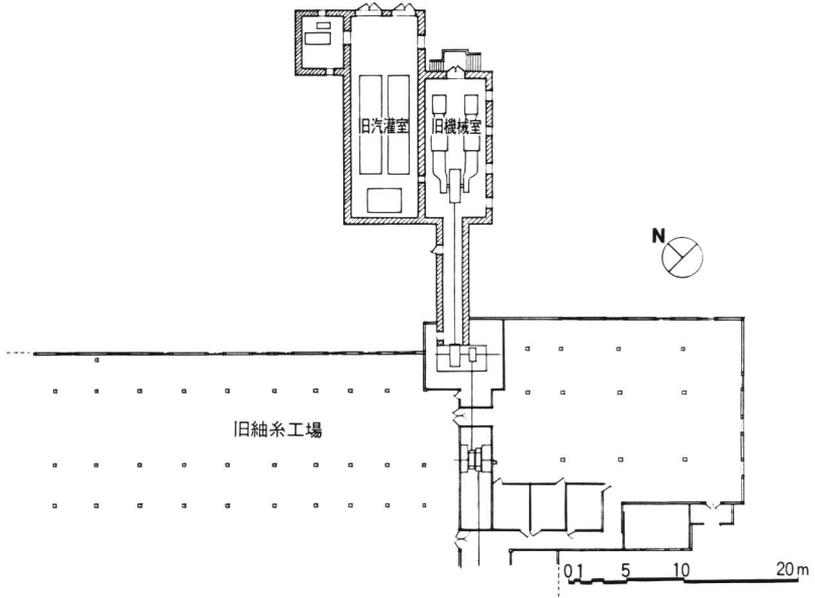


図 9 鐘紡合併時頃の平面図 (原図を部分トレースしたもの)

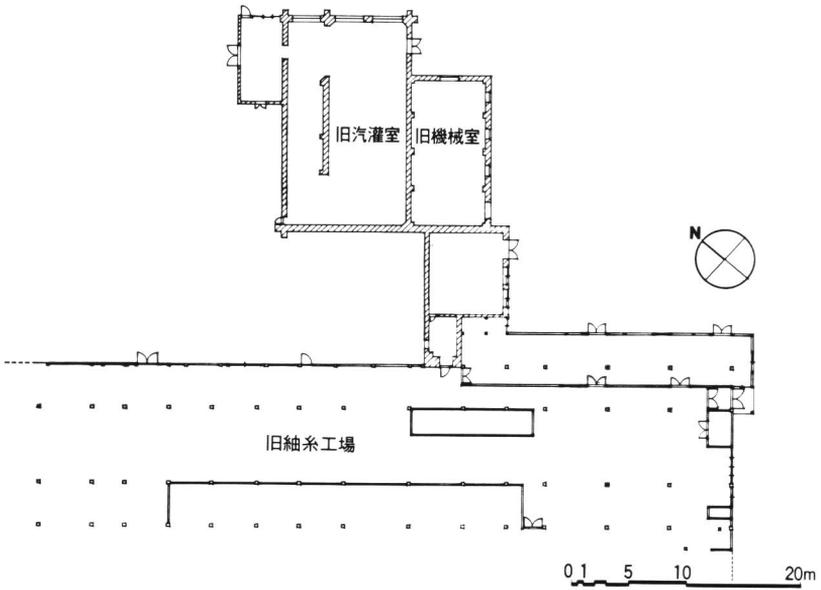


図 10 旧汽灌室・旧機械室・旧糸工場 (一部) 実測平面図

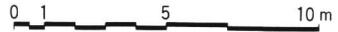
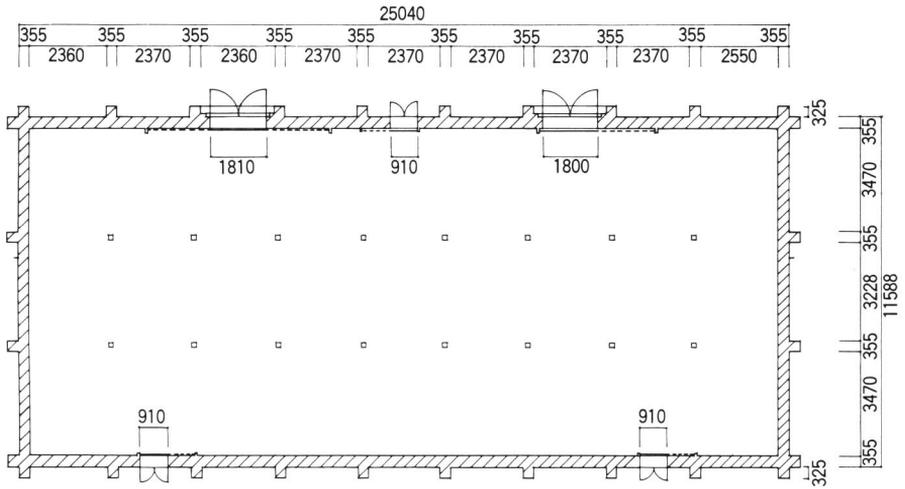


図 11 旧製品倉庫実測平面図

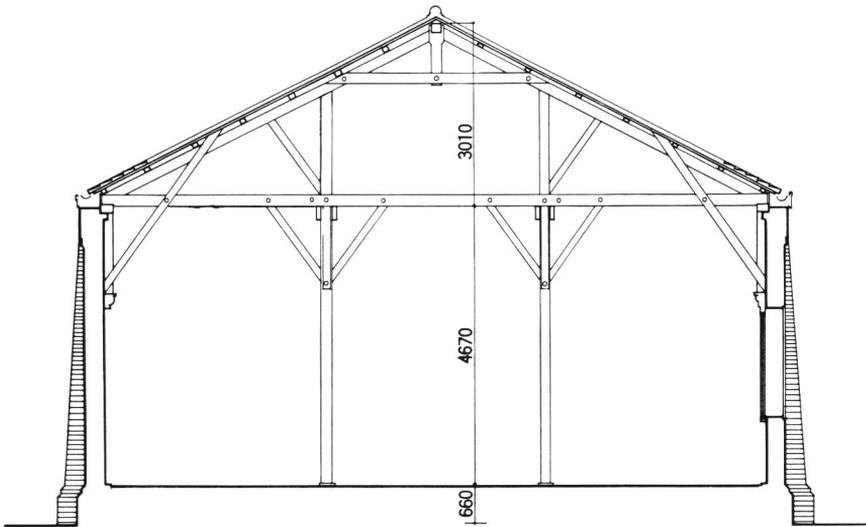


図 12 旧製品倉庫実測断面図

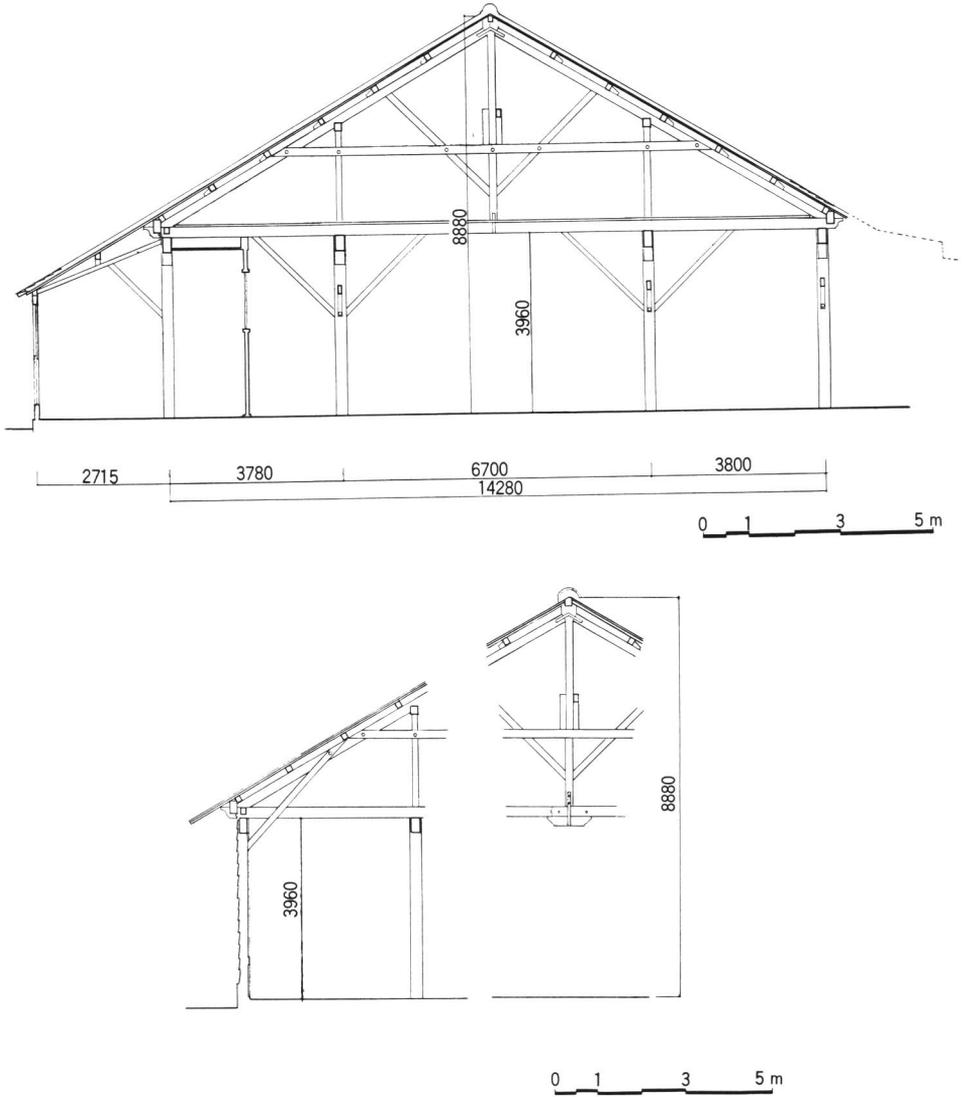


図 13 旧細糸工場実測断面図

3) 旧製品倉庫

a) 現状

旧製品倉庫は煉瓦造平屋建て、壁がイギリス積であり、屋根は寄せ棟瓦葺である。内部は床が板張りであり、小屋組は、斜め梁が壁に付いた受石から出て小屋に伸び、その受石の上に柱が付いている(図 11, 12)。ロンバルディア帯状の意匠を施すなど他の建物に比べ若干の装飾的要素が付加されている。

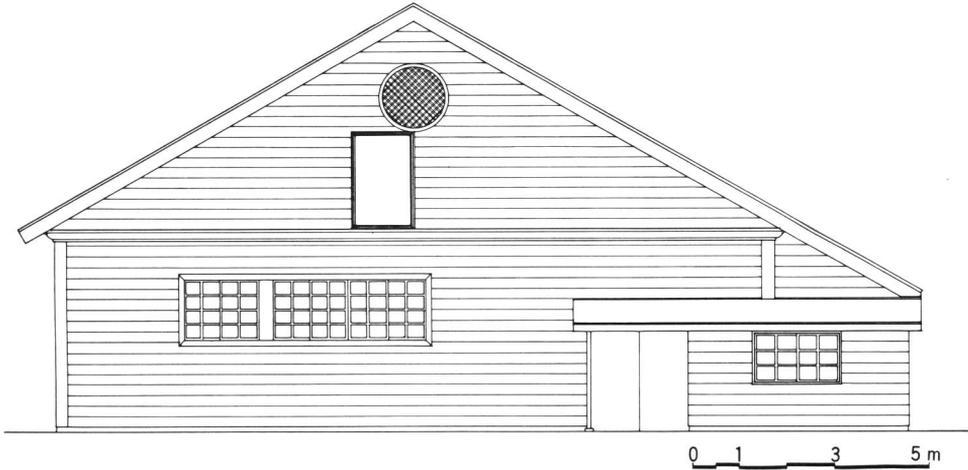


図 14 旧紬糸工場東側実測立面図

b) 竣工年と建物の変遷

前述の『三井銀行営業案内』(明治 32 年 1 月)の全景写真(図 2)には、現存建物と考えられるものが含まれており、明治 31 年には竣工していたと推定することは可能である。ただし、明治 27 年 6 月の『資産台帳』には、この建物は確認出来ない。

4) 旧紬糸工場

a) 現状

旧紬糸工場は木造平屋で、外壁は下見板張であり、明り取りの天窗の付く屋根は切妻で瓦葺である。内部は床が土間コンクリート、壁が堅羽目で、天井は工場東側の一部を除いて貼られていない。小屋組は、特色のある形態を持つ洋小屋組である(図 13)。また、工場北側棟の妻部分東側には、円窓が付いており外観上の特徴となっている(図 14)。

b) 竣工年と建物の変遷

『沿革』の「上州新町屑絲紡績所新築之図」(図 1)、「上野國綠埜郡新町駅地内勸業寮水車建築場縮図」<sup>80)</sup>と「鐘紡合併時頃の平面図」(図 9)から現状平面の位置的対応がほぼ成立する(図 15)。しかし、旧紬糸工場の一部についての実測(図 10)と「新町紡績所二百分之一絵図」(図 3)及び「鐘紡合併時頃の平面図」(図 9)を比較すれば、柱間間隔が相違しており、創立時の架構が大きく変更された可能性もある。一方、三井文庫所蔵の『三井銀行営業案内』(明治 32 年)の全景写真(図 2)では、妻側部分の現状に対応する姿をしている。このように本建物については、痕跡の複雑さにより年代の確定が出来なかった。しかし、設立時の建物であっても、架構等にかなりの変更が加えられていると考えられる。今後の本格的調査を待つこととし、本稿では竣工年を不明とする。

6. 結 論

以上の調査から、工場建物の竣工年については、次の点を明らかにすることができた。すなわち、旧二階家煉瓦庫が明治 27 年竣工と確定でき、旧汽灌室・旧機械室は、明治 31 年にはその基本建物はすでに存在しており、明治 27 年より同 31 年の間に建設されたと推定できた。旧製品倉庫も、この間に

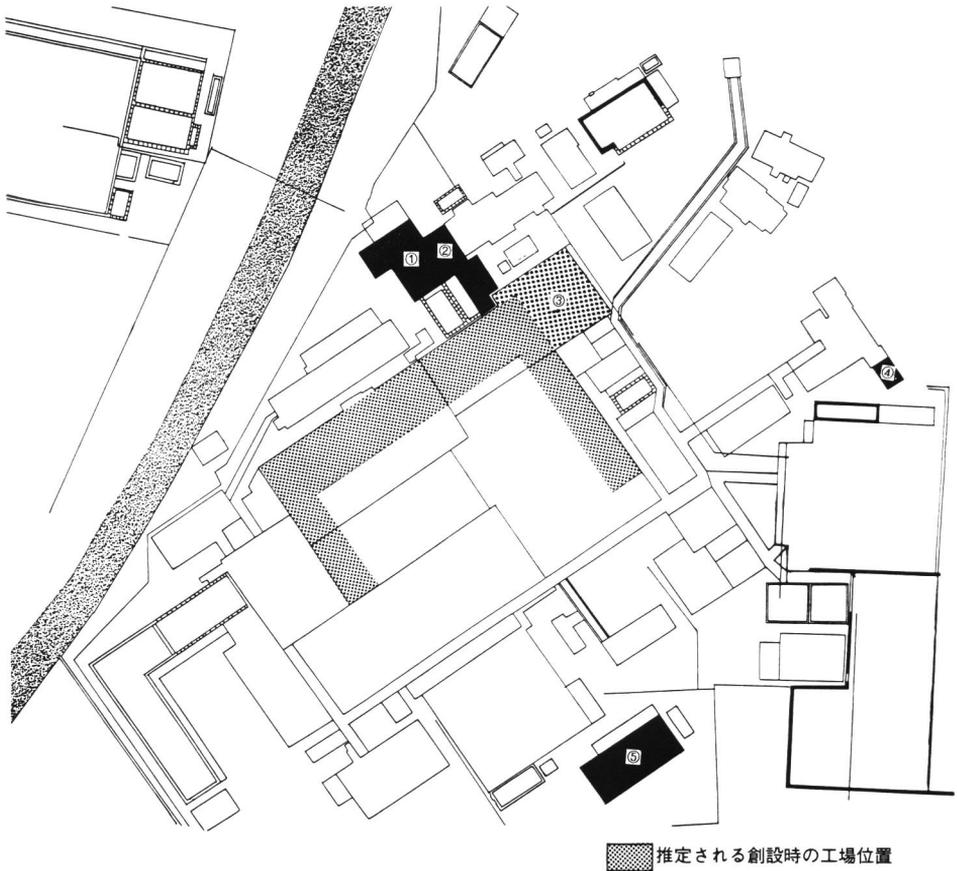


図 15 創設時の工場位置と現状の位置的対応

実測を行った建物（部分）：①旧汽灌室 ②旧機械室 ③旧糸工場・北側棟の妻部分  
東側 ④旧二階家煉瓦庫 ⑤旧製品倉庫

註）本図は創設時の建物の規模を中心に示しており、その位置については、誤差を含んでいる。

竣工した可能性が高い。旧糸工場については竣工年の確定ができず、創設時よりの部分が残っているとは断定できなかった。また、本工場の動力伝達方式については、明治 10 年の創設時が平衡水車（タービン水車）及び蒸気動力であり、明治 27 年より同 31 年の間に本格的な蒸気動力が、明治 44 年頃から大正 7 年には電気動力が一部導入されたことがわかり、これによって建物の状態に変化が見られた。

## 7. おわりに

以上、屑糸紡績所についての調査・研究結果を述べた。本稿が得た結論は 2 つの側面を持っている。先ず、第一に、建築調査から得られた成果である。それは結論において述べた如く明治 27 年に竣工し

た旧二階家煉瓦庫を始めとする明治期産業施設の現存を確認できたことである。一方、竣工時の基礎がおそらく未だ残っている可能性もあり、建物については旧紬糸工場など、今後の本格的な現地調査で創設時の工場本体が確認される可能性があることを指摘しておきたい。今回の調査は、あくまでも上屋を対象とした簡便な実測調査を行ったにすぎないのである。本調査結果より得られた結論によれば、現存建築の最初期のものとして確認し得た年代は明治 27 年であるが、たとえこれが最古のものとしても、我が国産業施設の遺構としては、初期のものと言うことができる。そもそも明治 30 年代以前の現存産業施設自体が極めて少ないという調査結果もある。<sup>8)1)</sup>

次に、内務省屑糸紡績所の歴史的な意義について述べたい。近代建築史上について述べれば、この工場が山添喜三郎、グレーフェン、佐々木長淳という導入期の技術者が埃国博覧会帰国後に建設した大規模な産業施設であり、邦人建築家の設計した産業施設としては、きわめて初期のものであるという歴史的な意義がある。この創設時の基本的形態が、その後の工場の変遷の中で、どのような発展をしたかを今回の研究で行った。これが現存施設調査の中でのケース・スタディの主要な目的であった。なぜならば、これまで調査されてきた近代建築とは異なり、このような工場施設は、動力方式の変化に対応して頻繁に改築・改造が行われると考えたからである。このような状況は、本稿での「沿革」、「建設過程」及び「現状調査」の稿の対応関係でとらえられるが、少なくとも施設の基本的構造を変えるような変容は 2 期で行われていたことがわかる。一つは水力・蒸気の複合の動力方式が蒸気単一型に変えられた時期であり、もう一つは電動機に置換えられた時期である。この動力方式の変化により、従来は最も重要な施設であった水車・蒸気力等の動力ユニットを覆っていた初期の上屋が不要になっていくのである。本施設は、このように建築的価値のみならず、動力方式の変化の跡を確認できる施設としても興味深いものであった。今回の調査では、この動力方式の変遷を確認することにより、産業施設の変化の過程を類推できることがわかった。これを今後の産業施設研究の一要素として研究を進めたいと考える。

末尾になったが、ご協力いただいたカネボウ食品工業新町工場、新町教育委員会、群馬県教育委員会の方々、また、準備調査の段階から資料などにおいて貴重な助言と多大な協力をいただいた千木良英一氏には、深く感謝申し上げます。

#### 註

- 1) 文部省科学研究費助成による「関東地方内陸部の産業施設についての近代建築技術史を軸とする調査研究」は、昭和 63 年度、平成元年度に行われた。この調査では、主要な明治より昭和戦前に建てられた産業施設の現存状況の概括的調査を行った。
- 2) 藤島亥治郎「現存する明治初期紡績工場建築」『日本建築学会研究報告』第 19 号 昭和 27 年等がある。
- 3) 産業技術史・経済史については、丸山知良編『産業遺跡を訪ねる(上)―ぐまの産業史・その光と影』あさお社 1987 年、岡本幸雄「官営新町紡績所の創立・経営関係史料」西南学院大学『商学論集』第 29 巻第 3 号 昭和 57 年等を参照したが、他の文献については現在のところ確認していない。
- 4) 村松貞次郎『日本近代建築技術史』彰国社 昭和 51 年をその代表とする。
- 5) 国立公文書館蔵『単行書総括目録』2 巻『新町紡績所沿革』明治 15 年。
- 6) 国立公文書館蔵『公文類聚』第 11 篇第 44 巻。
- 7) 宮内庁書陵部蔵「新町屑糸紡績所」写真、群馬県史編さん委員会編『群馬県史』第 23 巻 昭和 60 年 3 月より転載した。
- 8) 三井文庫蔵 三井銀行『三井銀行営業案内』明治 32 年 1 月。
- 9) カネボウ食品工業蔵 鐘淵紡績株式会社新町工場『明治大帝行幸記念・鐘淵紡績株式会社新町工場沿革概要』私家版 昭和 12 年 11 月。

- 10) カネボウ食品工業蔵 明治 27 年 6 月付『資産台帳』建築之部。
- 11) カネボウ食品工業新町工場の資料展示室等に展示・保管されている，以下の図面を参照した。
  - ① 「KANEGAFUCHI SPINNING CO. SHIMMACHI MILL」(明治 44 年 10 月 17 日，平面図)
  - ② 「KANEGAFUCHI SPINNING CO. SHIMMACHI MILL」(鐘紡合併時頃，平面図，縮尺 1/200)，この図面は，年代についての記入が無い。しかし，建物の増築関係から①に近い頃の図面と考えられる。そこで，鐘紡合併時頃とする。
  - ③ 「新町工場建物配置平面図」(大正 3 年，縮尺 1/1200)
  - ④ 「鐘淵紡績新町工場実測図」(大正 3 年，平面図，縮尺 1/300)
  - ⑤ 「KANEGAFUCHI SPINNING COMPANY LTD. SHIMMACHI SILK MILL」(大正 7 年 10 月 1 日，平面図，縮尺 1/400)
  - ⑥ 「鐘淵紡績株式会社新町工場建物配置整理予想案全図」(大正 9 年 2 月，縮尺 1/600)
- 12) 前掲『新町紡績所沿革』。
- 13) 前掲『公文類聚』第 11 篇第 44 卷。
- 14) 三井文庫『三井事業史・本篇第二巻』昭和 55 年によれば，この工業部の新設は，三井の系列工場を統合するものであり，他に芝浦製作所・富岡製糸所等も三井銀行から移管されている。この統合では，他の系列工場との連携があったようで，新町紡績所に芝浦製作所等の機械製品が導入された可能性がある。
- 15) 前掲 三井文庫『三井事業史・本篇第二巻』。
- 16) 前掲 鐘淵紡績株式会社新町工場『明治大帝行幸記念・鐘淵紡績株式会社新町工場沿革概要』。
- 17) 前掲『新町紡績所沿革』。
- 18) 前掲「新町屑糸紡績所」写真，群馬県史編さん委員会編『群馬県史』第 23 卷 昭和 60 年 3 月より転載した。
- 19) 版画右隅に「上州新町駅売捌人石川徳太郎版」とあるが，出典については不明。
- 20) 前掲『新町紡績所沿革』。
- 21) 田中芳男，平山成信編『漢国博覧会参同記要』明治 30 年 左記は，明治文献資料刊行会『明治前期産業発達史資料』第 8 集 (2) 昭和 39 年を参照した。なお，山添喜三郎については，藤森照信の先行研究がある(藤森照信『山添喜三郎』東北大学卒業論文 昭和 45 年)。
- 22) 前掲『公文類聚』第 11 篇第 44 卷。
- 23) 前掲 明治 27 年 6 月付『資産台帳』建築之部。
- 24) 前掲 三井銀行『三井銀行営業案内』。
- 25) 前掲 鐘淵紡績株式会社新町工場『明治大帝行幸記念・鐘淵紡績株式会社新町工場沿革概要』。
- 26) 前掲 明治 27 年 6 月付『資産台帳』建築之部。
- 27) 前掲「KANEGAFUCHI SPINNING COMPANY LTD. SHIMMACHI SILK MILL」(大正 7 年 10 月 1 日，平面図，縮尺 1/400)。
- 28) 前掲「KANEGAFUCHI SPINNING CO. SHIMMACHI MILL」(鐘紡合併時頃，平面図，縮尺 1/200)。
- 29) 前掲「鐘淵紡績新町工場実測図」(大正 3 年，平面図，縮尺 1/300)。
- 30) 国立公文書館蔵『公文録』内務省之部八「屑糸紡績器械所敷地買上ノ儀伺」明治 8 年 12 月，群馬県史編さん委員会編『群馬県史』第 23 卷 昭和 60 年 3 月を参照した。
- 31) 八尾市教育委員会『旧帝国製紙八尾工場の明治建築』昭和 63 年。

補注：今回の調査では，工場側に年代を確定できる資産台帳等の記録の存在を問い合わせたが，確認し得たものは本稿に掲載したもののみであったことを記しておきたい。また，本実測調査については，研究の必要上，特に本研究と密接に関係する施設についてのみ行ったのであり，今後の詳細な研究によって建築史上，明治期の重要な遺構が発見される可能性のある事を付記しておく。

※本調査にあたっては，昭和 63 年度・平成元年度文部省科学研究助成費の一部を使用させていただいた。